

小児前庭部胃炎の胃粘膜における
Campylobacter pylori (C. p.) の
存在

Association of *Campylobacter pylori* on the gastric mucosa with antral gastritis in children: Drumm B, et al (N Engl J Med 316: 1557-1561, 1987)

胃粘膜に C. p. が存在することは、原発性前庭部胃炎 (primary antral gastritis) と特異的に関連があり、原発性十二指腸潰瘍 (primary duodenal ulceration) とも関連しているらしい。

1985 年 10 月から 1986 年 6 月の 9 か月間に消化器症状のある連続する 71 例 (5 か月～18 歳, 平均 11.4 ± 3.8 歳) の小児に胃内視鏡検査を行い、そのうち 67 例の胃生検組織につい

て prospective に検索した。組織学的に 18 例に前庭部胃炎を認めた。このうち病歴や組織所見で胃炎の原因を認めうる続発性胃炎は 8 例 (胃十二指腸 Crohn 病 3, 好酸球性胃炎 3, 薬剤服用 3 < acetylsalicylate 2, corticosteroid 1 >) で、いずれも urease test 陰性、銀染色・培養とも C. p. を認めなかった。

原因を認めない原発性胃炎 (primary gastritis) は 10 例 (12.1 ± 3.4 歳) で、そのうち培養および銀染色でそれぞれ 7 例に C. p. を認めた。C. p. は常に粘液層の下または内部に認められた。urease test は施行した 6 例中 3 例のみ陽性であった。驚くべきことに、原発性胃炎と判定した 10 例のうち内視鏡肉眼所見で胃炎があると判定された例は 2 例にすぎなかった。胃生検が正常で

あった 49 例では組織所見 (銀染色)、組織培養とも C. p. を検出せず urease test も陰性であった。

すなわち C. p. は小児の原発性胃炎に特異的に併存していると思われる。また検査中に 5 例の十二指腸潰瘍を認め、全例の胃粘膜から C. p. を分離し、4 例の生検で炎症所見を認めた。しかし生検した十二指腸粘膜からは C. p. は分離されず銀染色でも認められなかった。十二指腸潰瘍を持つ 5 例のうち 2 例を 2 ないし 6 か月後に再度生検したところ、銀染色および培養で C. p. の存在が確認された。C. p. を伴った胃炎は十二指腸潰瘍を合併するのかもしれない。

(関東通信病院消化器内科

土谷春仁 抄)